

ねじりはちまき

5月 皐月（さつき）立夏 小満の月です。
5月1日、メーデーと八十八夜と一緒です。3日、憲法記念日。
4日、みどりの日。5日、子どもの日で節句ですね。
8日、母の日で、20日が小満です。

メーデーとは、労働者のお祭りのようなものですね。
日本では今から96年前、1920年から行われました。
権利の主張や待遇の改善などを叫びながら行進するのは、5月の風物詩
になっていますね。

夏も近づく八十八夜と歌にもありますが、これは立春から数えて八十八日
目の夜にあたります。特にお茶摘みはこの日から最盛期になるのだそうです。
この日に摘んだお茶を飲むと、長生きをするという言い伝えもあるようです
ね。ゆっくりと緑茶をすすめるのも、おつなものですね。

本当に過ごしやすい季節とはいいいながらも、夜分には肌寒さを感じるこ
ともあります。どうぞ、お体に気を付けて。

幸田 常一



お世話になっております。
現場は本宮市で、会社さんの事務所建設工事を始めさせて頂いております。

私の今住んでおります我が家は、平成元年に幸田建設様に建てて頂いた家です。新築して以来28年になりますが、5年前に発生した東日本大震災の被害も建物自体にはほとんどなく、(家財やパソコンなどに大きな被害が出ましたが…。我が家の周囲の家では、屋根瓦が落下するなど、家そのものに大きな被害が発生しましたのに。)お陰様で、安心・安全な生活を続ける事が出来ました。これも偏に、幸田建設様の誠実な施工と卓越技術の賜物と、日頃から感謝しつつ生活を続けております。

我が家を建築して頂く頃は、木造の家の耐用年数は30年といわれておりましたが、間もなく建築30年になろうとしておりますが、全く住むことに不安はありませんでした。

ところが、本年3月末に雨が降り、玄関と廊下の境で雨漏りしている事を発見しました。早速幸田建設様に電話で点検をお願いしました。その後、雨の翌日早速社長様自ら点検に来て頂きました。雨漏りの箇所と理由を説明して下さい、後日板金屋さん(玄関の部分は瓦葺きでなく銅版葺きの為)を差し向けるとの仰せでした。

早速板金屋さんが来て、雨漏り箇所の修理をして頂きました。その後3度程雨の降る度に修理した箇所を点検し、修理が完璧である事を確認して頂きました。修理は完了しましたが、壁の一部を修理の為に壊したので、後日壁屋さんが来ますといわれました。

この様な経緯を辿り再び安心して生活が出来る様になりましたが、家を1軒建てるのには多くの業者さん(専門家)の結集が必要である事、その業者さんを束ねる為の統率力が建設会社の社長さんには必要である事が理解出来、社長さんへの尊敬の念を厚くしました。

更に板金屋さんが修理した箇所が、完全に修復されたかどうかの確認の為、雨の日は勿論、雨の翌日にも数回に渡りご足労頂き点検をして頂きましたが、その責任感の旺盛さに感激すると共に、感謝の心を一段と厚くした次第です。

この様に、自分の仕事に責任を持つ事は生きていく為の基本である事を、幸田建設の社長さんは日頃から社員を始め、傘下の専門の職人の方々に徹底されているのだと感じました。私は終の住家とする為、家を新築しようと考えある人の紹介を受けて幸田建設を創業された前社長様をお願いをして新築して頂きましたが、2代目の社長様も先代社長の創業の基本がきちり継承されている事を理解する事が出来、更に何とも心の温かい人々に囲まれて生活出来る事に幸せを感じるこの頃です。

夢を見続ける男 NO25

フーテンの寅さんと裸の大將

今回は映画「男はつらいよ」と「裸の大將」を取り上げたい。この二つの作品は、小生がよく好んで観た数少ない作品であり、1昨年来テレビで再上映されて観る機会があった。この二作品に何故魅かれるのか自分でもよくわからないが、先ずは書き進めてみたい。

先ず「男はつらいよ」であるが、1969年から1955年までの間、シリーズで48作品（26作目までがテレビ）が公開された。山田洋次 原作・脚本・監督（1作品除く）で、主役は「フーテンの寅」こと車寅次郎で、演ずるは渥美清（故人）である。主役を支える「妹さくら」役は倍賞千恵子である。フーテンの寅（以下「寅さん」という）は、独り身で、生業はテキ屋で北海道から沖縄まで全国（外国も1回あった）を股に歩く。つまり作品ごとに旅先が違ふ。旅する身にしては財布がいつも軽い。何かにつけ、妹さくらが兄のため都合してくれる。時にふらりと葛飾柴又の生家「だんごの虎屋」に戻ってくる。そしてひと騒動を起こすのだ。全作品にこの場面は登場する。その騒動も妙にユーモラスで、どうも憎めない。生家「虎屋」のある葛飾柴又は、帝釈天の門前町で、人情に篤い下町といったところだ。「虎屋」の家業はおじちゃん、おばちゃん、さくらの3人で切り盛りしている。つまり、寅さんは跡取りだが、家業を継いでいない。親に早く先立たれ、どんな育ち方をしたもののか、ルールに従ってきちんとやる仕事の方には向いていない。たまに仕事を手伝うこともあるが、かえって仕事の邪魔をしてしまう。でもその的外れ振りに愛嬌がある。それと毎回登場人物にさくらの夫博と博が勤める隣の印刷会社のタコ社長がおり、タコ社長と寅さんは必ず喧嘩になるが、子どもの喧嘩のようでこれまたユーモラスではある。ここで気が付いたことがある。全作品を通して成長を見せるのが、博とさくらの息子・満男である。幼少の頃から大学生・社会人となって登場する。満男は成長するにつれ、寅さんを軽蔑しているようで、何にも縛られない寅さんの生き方に憧れているようでもある。寅さんは満男にいいアドバイスをする時もあるのだ。それが結構満男に効いている。虎屋を巡る大事な人間をもう一人加えるとすれば、帝釈天の御前様だろう。寅さんが頭の上がない存在は、この御前様とさくらである。さくらは寅さんのことで度々御前様にアドバイスを受ける。そのアドバイスがいい得て妙なる、なかなか味わい深いものなのだ。これまでが葛飾柴又の主な人間模様だが、各作品のメインとなる見どころは、マドンナの登場である。マドンナ役は一流の女優。作品ごとに寅さんには素敵なマドンナとの出会いが待っている。やがてそのマドンナに寅さんは信頼を寄せられ、好かれるのだ。心のうちを明かしてくれる。それに対して相手を思いやった、結構まともなアドバイスをしたり、励ましたりする。場合によっては、身を粉にしての献身ぶりを見せる。マドンナに「寅さんはとても温かい」と言わせる。そうではあっても、甘いひと時は終わりを告げ、結末は失恋するか自分の方から身を引くことになる。そしてまた旅に出るというパターンだ。「温かい」と言えば、つらい思いをしているマドンナが虎屋を訪れ、一家団欒の食事に招かれると「これが幸せなのね」としみじみ言う場面もある。「男はつらいよ」はあらましこんな感じだが、一口に言えば笑いと涙のある人情喜劇といったところである。この寅さんシリーズに貫かれているのは、人を思いやり、人のことを放っておけない人情熱き人々の姿であろうか。寅さんはその代表格で、風来坊で常識外れに見えながら、世間の型に縛られない、人間としての生き方の大事なところは外さない。人情熱き生き方を象徴する存在として描かれている。小生はそう思う。どうもそんな点に魅かれているのだ。経済優先と都市化が進む中で考えさせられる作品である。実は寅さんはテレビの26作目でハブに噛まれて死んだのだが、その死に対して視聴者から抗議が相次ぎ、山田監督が映画で再スタートさせたのだそうだ。そうそう思い出したが、女優浅岡ルリ子演ずるマドンナの「リリー」は、北海道舞台で2回、沖縄舞台で2回と計4回も登場する。しかも4回目は最後の48作に登場するのだ。マドンナの中でも「リリー」は寅さんと気が合い、寅さんと対等にやり合い、喧

嘩もする仲だ。その仲をみて妹さくらはリリーと寅さんの結婚を望む。でもその望みは果たせずにドラマは終わる。いや終わらせたのだ。渥美清はこの48作の撮影に耐えられるかどうかという状態にあったのだそうだ。渥美清は48作の公開の1年後に亡くなる。最後に山田監督の言葉―「ありえない世界をリアリティに撮ることに心掛けた」ということだ。わかるだろうか。

次は「裸の大将」の話に移ろう。放浪の画家「山下清」をモデルにした人情テレビドラマだ。山下清の絵は「貼り絵」だ。「花火」や「桜島」の作品は見た方も多いだろう。山下清（以下、清という）は八幡園という施設を飛び出して放浪の旅に出るのだが、スタイルはランニングシャツに半ズボン姿で下駄ばき、そしてリュックを背負っている。旅先は全国だ（外国も1回あった）。旅では何故か線路を歩く場面がよく出てくる。山下清を演ずるのは芦屋雁之助（1984～1997年主演）だ。清は欲のない、飾らない、純真な、人を疑うことを知らない。食べ物で好きなのは塩の握り飯だ。それさえあればいい。清は行く先々で様々な出会いがあり、その中で「清さん」と清に好意を寄せる人が登場する。やがてその人が抱える悩みや問題を知るところとなり、放おってはおけず、その悩みや問題解決に懸命になるのだ。敏腕を振るうというのではなく、一見稚拙のようにみえる振る舞い中で、清の人を思いやる誠意が人の心を動かして、人々を和解に導いたり、抱える問題を解決してしまったりで、目出度し目出度しで終わるのだ。最後に自分のネーム入りの「貼り絵」作品を残してその場を去るのだ。清は純真なるがゆえに人の心を見抜くのに鋭いものがあり、又は人を心底から信じ切るその力には凄いものを感じる。持ち金がない故に食い逃げ同然となり、借金代わりに店で働くことがあるが、これまた見事に失敗ばかり仕出かす。その点はフーテンの寅さんと同じだ。一生懸命なのだから憎めない。そして最後の場面がいい。世話になった御礼の気持ちを込めて、その地での思い出を「貼り絵」に表し、その作品を残し置いて、人に知られぬように去るのだ。人々はその「貼り絵」のネームを見て、清を「山下画伯」と知り、大騒ぎとなり、山下画伯を追いかけるが既に画伯の姿はない。人知られぬように去ってしまうのが清の人柄を表している。これはなかなか出来ないことだ。全く欲がない。これら二つの作品の主人公に魅かれるのは、自分にはないものを感じて憧れているのかも知れない。実際の山下清はどんな人だったのだろうか。放浪の画家といわれるように、18歳の頃から入園していた養護施設「八幡園」を飛び出して数か月、長くは数年の間放浪の旅をしては戻ってきた。それが約14年間続いたとのこと。施設を飛び出したのは、施設の束縛から解放され、自由な時間を得るためだったという。実は「ちぎり絵」との出会いは八幡園に入ってからで、清はそれを独自の技法で「貼り絵」に発展させたのだ。だが、放浪の旅に出たのは、絵を描くためではなかった。旅先で「貼り絵」は1枚も描いていない。山下清の日記によれば、「ぼくは放浪している時絵を描くために歩いているのではなく、きれいな景色やめずらしいものを見るのが好きで歩いている。貼り絵は帰ってから思い出して描くことができた」ということだ。美に対する感性は抜群だったに違いない。今回はこれで終わる。

ツルニチニチソウ

花言葉…「優しい思い出」

桜の季節があっという間に過ぎてしまいましたが、藤の花やツツジの花が今キレイに咲いていますね。

また、ツルニチニチソウもキレイに咲いています。

先日犬の散歩に出ましたら、ツルニチニチソウがびっしりと咲いているのを見つけました。

光沢のある美しい緑色の葉っぱの間から、青紫色の花が顔を出し、青紫色が美しくとても清楚な花だと思いました。



今月の旬♡食材

「豆苗」 トウモロコシ

スーパーなどで年間通して販売されていますので、いつでも食べることができますが、4月5月が旬です。

青々としていて、見るからにおいしそう。風味豊かなお野菜です。

豆苗には、βカロテンがホウレンソウなどよりも多く含まれています。

また、他にも体内でビタミンAに変換され、髪や粘膜や皮膚の健康維持、のどや肺など呼吸器系統を守る働きがあるといわれています。

私の家でも今豆苗を食べています。

買って来た豆苗を包丁でざっくりと切り、下の豆の部分は捨てずに水につけておくと、しばらくしてひよろひよろと芽が出て来ますので、また収穫して食べることが出来ます。すでに、もう2回収穫したので、さすがに莖が細くなってしまいました。でも、水をこまめに取替えてやれば細くても育ちますから、お料理していて、ちょっと緑がほしいときや、お味噌汁、野菜炒め、卵焼きに入れたりして色々使えます。しかも、体にもよいのですから素晴らしいお野菜だと思います。

.....

八十八夜

夏も近づくと八十八夜～♪の歌い出しで知られる「茶摘(ちゃつみ)」。
1912年(明治45年)に発表された、日本の唱歌・童謡です。

立春から八十八日め、5月1日頃がこの日にあたります。
お茶を摘み始める日で、摘まれた一番茶が新茶として出まわりますね。
八十八夜の別れ霜、という言葉もあるように、寒い北国でもこの頃には
霜の心配も少なくなるので、色々な作物の種を植える時期でもあるのだ
そうです。

新茶でほっと一息つきたいものですね。^-^

.....

<会社近況>

5月に入りました。山々の緑も少しずつ鮮やかに濃い緑色になってきて
きれいなものですね。暖かい、いい季節になりました。
たまには外に出て、山の緑を眺めたり、土手の草花を眺めたり、大きく深呼吸
するのは、気分転換になっていいと思いました。

さて、現在は本宮市の現場で、事務所の建設工事をお世話になっております。
お盆の頃には完成の予定です。
また、昨年からお話しを頂いている現場の打合せがずっと続いており、図面や
書類の作成などさせていただいております。

(お詫び)

先月号は、十数件お便りをお届けすることができませんでした。
これは私のミスで、発行する前の確認が不十分だったせいです。
申し訳ありませんでした。

.....

平成28年 5月5日発行
有限会社 幸田建設
<発行責任者>幸田久美
〒969-1204
本宮市糠沢字八幡1-1
電話、0243-44-3816

<後記>
今月は、k・s様、夢を見続ける男様
から、早々と原稿を頂いていたにも
関わらず、かなり発行が遅れて
しまいました。すみません。
事務員k